

92/10/25

隠れ家・台本

岸田理生

# 1 覗く

空間の背後にはく壁>がある。

<壁>は、しばらくの間、静まりかえっている。

やがて、マザー・グースに載る童謡<蜘蛛と蠅>を唄うボーイ・ソプラノの声が流れ込んでくると、<壁>には、小さな矩形の窓が開き、片目に黒い眼帯をかけた男の顔が現われる。

黒い眼帯の男は覗いている。その表情はさまざまに変化するが、愉悦の気配が濃い。

また窓が開く。すると片目に白い眼帯をかけた女の顔が現われる。

白い眼帯の女は覗いている。黒い眼帯の男同様、表情が変化する。

また窓が開く。すると片目に赤い眼帯をかけた女の顔が現われる。

赤い眼帯の女は覗いている。白い眼帯の女同様、表情が変化する。

また窓が開く。すると片目に緑色の眼帯をかけた女の顔が現われる。

緑色の眼帯の女は覗いている。赤い眼帯の女同様、表情が変化する。

窓は次々に開いてゆき、さまざまな男女の顔が現われる。

彼等は一様に愉悦の気配を見せながら覗き続けている。

そして彼等は眼を病んでいる。

黄色い眼帯の男、青い眼帯の女、茶色の眼帯の女、金色の眼帯の女、銀色の眼帯の女、紫色の眼帯の男、灰色の眼帯の女、桃色の眼帯の女、若草色の眼帯の女、薄茶色の眼帯の女、濃紺の眼帯の女、水色の眼帯の女。

人々は長い間、覗き続けている。覗いている自分を覗く他人の眼差しがあることに気付かず覗き続け

ている。

やがて童謡が風に紛れて消えてゆくと闇が訪れる。

## 2 花見

溶明すると、そこには四人の女たちがいる。

四人の女たちは車輪のついた矩形の箱車に座って一列に並んでいる。

四人の女たちは、花、花代、花江、花子と名付けられている。

四人の女たちは、花見の真っ最中である。

四人の女たちは、最初の内、じっとしているが、やがて車輪を利用して好き勝手に動きまわり、話し始める。

花 春は桜の 花の中

花代 万朶の桜 花扇

花江 風のない時 花 ところり

花子 風の吹く時 花 ゆらり

花 満ちて咲く花 時 定め

花代 花の驕りの 春は昼

花江 月と交わる 春は夜

花子 桜 色風 匂い風

花 ウツクシイワネ

花代 ウツクシイワヨ

花江 ウツクシイカラ

花子 ウツクシイノヨ

花 春は花見の 花の下  
花代 私たちつて 春かしら  
花江 花によく似て 現在(いま) かしら  
花子 鏡に映る 花かしら

花 イイワネ  
花代 イイワヨ  
花江 イイカラ  
花子 イイノヨ

花 花が散る散る 花が散る  
花代 チルチル ミチル 時の中  
花江 チルチル ミチル 花 満ちる  
花子 桜 花散る その無残

花は花代に話しかける。

花 時計持ち出したの あんたでしょ  
花代 違います 花子さんです

花江は花子に話しかける。

花江 時計を止めてよ 花子さん

花子 はい 止めました 花江さん

四人、動きまわりながら、

花 時計と桜は似合わなくってよ 花子さん  
花代 財布と桜は似合わなくってよ 花子さん  
花江 豚と桜は似合わなくってよ 花子さん  
花子 だったら なにが似合うんです 花さん

花は答える。

花 そうね例えば 心中かしら  
そうね例えば 庖丁かしら  
そうね例えば 血の色かしら

花子は花に訊く。

花子 それだけですか 花さん

花は答える。

花 心中 庖丁 血の色 真っ赤  
刺して刺されて いい気持  
私の体に降る花 連れて

今日は天国 花祭り

四人、動きまわりながら、

花代 いいわねえ 心中

花江 いいわよお 庖丁

花子 いいわ 血の色

花 いい 記憶

花江 心中しましょうか 花代さん

花代 庖丁しましょうか 花さん

花 血の色しましょうか 花子さん

花子 できごとしましょうか 花江さん

花江 はい 花子さん

花子 はい 花さん

花 はい 花代さん

花代 はい 花江さん

四人は揃って言う。

四人 花さんと 花代さんと 花江さんと 花子さんは 花見でありました

花 春の真っ只中でありました

花代 陽ざかりの 午後の三時でありました  
花江 この世の見納めの 酒盛りでありました  
花子 食べ納めの 卵焼きでありました

四人 花さんと 花代さんと 花江さんと 花子さんは 庖丁でありました

花 よくつて 花代さん

花代 よくつてよ 花さん よくつて 花江さん

花江 よくつてよ 花代さん よくつて 花子さん

花子 よくつてよ 花江さん よくつて 花さん

花 よくつてよ 花子さん

四人 花さんは花代さんを刺しました 花代さんは花江さんを刺しました  
花江さんは花子さんを刺しました 花子さんは花さんを刺しました

花 一 二の三 セーの でありました

花代 あつという間のできごとでありました

花江 チルチル血潮 ミチル花

花子 世間によろしく さようなら

四人 世間によろしく さようなら

四人、動きまわりながら、

花 愉しかったわね 花見

花代 面白かったわ 心中  
花江 愉快だったわ 春  
花子 きれいだったわ 桜

花 あした また 死にましようね 花代さん  
花代 あした また 死にましようね 花江さん  
花江 あした また 死にましようね 花子さん  
花子 あした また 死にましようね 花さん

四人 そう言つて 私たちは笑つたのでありました

隠れ家は春でありました

桜でありました

一年中でありました

四人は箱車を動かして去つてゆく。

四人の女たちのく花見>の間、黒い眼帯の男、黄色い眼帯の男、紫色の眼帯の男は窓から覗き続けているが、女たちが去ると窓を閉める。



冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温

怖がっているのよ。

何を？

わかっているでしょうに……、

言つてよ……。

私が、いる、と、名指したことを、あなたは、ある、と、否定したからよ。

沈黙するわ……待って……。」

待つわ……。

待っているのね……。

待っているのよ……。

この時間……本当に経過しているのかしら？

経過しているわ。

それは、意味の時間？

かしら……？わからない……。

あなた……逃げている……。

話をはじめたのは……どっちだった？

わからない……。

わからないことの中で……、

わからないことの中で……？

ねえ……、

えっ？

私が、いる、と、名指したことを、あなたは、ある、と、否定した……、

と、私は言った。

そうそうして……、私は、「待って」、と、言った。

そう。言ったのは……あなただわ。

冷 温 冷 温 冷 温 冷 温 冷 温 冷 温 冷 温 冷 温 冷 温 冷 温 冷 温

なんだった？

えっ？

私たち、何を話しはじめていた……？

待って……、

待つわ……。

すだく虫の音……聞いているわ……私たち。

聞いているわね……すだく虫の音。

りーんりーん……松虫？

さあ？……すいっちよすいっちよ……蟋蟀？

さあ？……がちゃがちゃがちゃがちゃ……轡虫……。

そうね……がちゃがちゃがちゃがちゃ……轡虫。

轡虫……、

えっ？

来年も生きてあるのかしら……今、今の只中……鳴いている轡虫……、

私たち……、

えっ？

来年も生きて、いるわ……、

ほうら……、

えっ？

あなたが言ったことよ。

そうね。

そうよ。

私……言ったわ。

あなた……言ったわ。

冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温冷温

言葉が意味ではないと……解り合った……時間があつて……日々があつて……、  
そうね……それでもまだ……。  
怖がつているのよ。

何を？

わかっているでしょうに……、  
言つてよ……。

私が、いる、と、名指したことを、あなたは、ある、と、否定したからよ。

生きて……ある……かしら……私たち？

生きて……いる……かしら……私たち？

ある……、

いる……、

ねえ……、

えっ？

おなか……空かない？

……空いたわね。

はつきりと空いた？

怒るわよ、私。

えっ？

なんでそんなことまで、確認し合わなくちゃいけないの……私たち。

ごめん……。何が食べたい？

作るのは私よ。

ごめん……。私……、

何が……食べたい？

あなたが作ってくれるものはなんでも……。

冷 温 冷 温 冷 温

すだく虫の音……聞いているわ……私たち。

聞いているわね……すだく虫の音。

りーんりーん……松虫の……からあげ。

いいかもしれない……すいっちよすいっちよ……蟋蟀の……からあげ。

がちやがちやがちやがちや……轡虫のからあげ、よそうね。

うん、よそう……がちやがちやがちや……轡虫のからあげ。

温と冷は纏れ合いながら去ってゆく。

温と冷の話が続く間、<壁>の窓は開いて、赤い眼帯をかけた女、灰色の眼帯をかけた女、薄茶色の眼帯をかけた女の三人が覗いている。

温と冷が去ると窓は閉じる。

## 4 <壁>

隠れ家

無人となった空間にマザー・グースの童謡くのろまのサイモン>が流れると、そのメロディに合わせるようにして三人の男が現われる。

男たちはそれぞれ手に馬穴を下げていて、刷毛を取りだす<壁>を塗り変えはじめる。

一人は大雑把に塗り、一人は細部に拘り、一人は執拗に一箇所だけを塗り続ける。男たちはサイモン1、サイモン2、サイモン3と名付けられている。

サイモン1 わからないことがあるんだ。

サイモン2 と、いうことは、わかっていることもあるんだな。

サイモン3 俺なんぞ自慢じゃないが、わかっていることなぞ、何一つないぞ。

サイモン1 会話をしたいんだがね、俺は……。だってさ、午後の空は、よく晴れて、風もなく、絶好のペンキ日和じゃないか。

サイモン3 ペンキ日和……？そんな言葉があるなんて、はじめて知った。

サイモン1 黙って聞けよ。

サイモン3 聞きます。

サイモン2 どうせ明日になりや忘れちまうんだから。

サイモン3 ペンキ日和がどうかしたんでしょか？

サイモン1 ペンキ日和だからさ、俺は楽しく労働をしたい訳だよ。

サイモン3 労働しましょう。楽しくしましょう。

サイモン1 そのために楽しく会話しようと思っっているんだ。

サイモン2 で？おまえのわからないことは？

サイモン1 人を殺すってことが、俺にはどうしてもわからない。世の中には、平気で人を殺せる

人間と平気で人を殺せない人間がいてさ、勿論、平気で人を殺せない人間の方が、世の中、多い訳なんだけれどもさ、例えほんの少しとは言え、平気で人を殺せる人間がいることも事実だ。それで、だ。仮に殺せる人間をプラス人間、殺せない人間をマイナス人間と呼ぼう。

サイモン3 トマト人間とキュウリ人間。俺は、そう呼びたいね。

サイモン1 わかった。で？どっちがトマトで、どっちがキュウリなんだ？

サイモン3 悩むなあ。

サイモン2 悩むなよ、苛々する。

サイモン3 決めて下さい。

サイモン2 殺せる方がトマトで、殺せない方がキュウリ。

サイモン1 殺せる方がトマトで、殺せない方がキュウリだな。

サイモン2 殺せる方がトマトで、殺せない方がキュウリだ。

サイモン1 わかった。で、さ、殺せないキュウリ人間でも、戦争に行ったりすると、トマトになる。

サイモン3 植物学を無視してる。キュウリはどうやったってトマトにならないですよ。

サイモン1 こいつにペケ1をやってくれ。

サイモン2 ペケ1。

言いながらサイモン3の額にX印を書く。

サイモン2 話を続けてくれ。

サイモン1 殺せないキュウリでも戦争に行ったりするとトマトになる。嫉妬に狂って女房を殺すこともある。

サイモン2 子供を殺して無理心中することもある。

サイモン1 キュウリには、いつもなにがしかの理由がある。だが、トマト人間の方は自分の前に立

ちふさがるものは、動物でも人間でも見境もなく殺してしまう。泥棒に入って、家の者が眼を覚ましたら、平然と殺してしまう、なんてのは、このトマト人間だ。

サイモン3

サイモン1

サイモン2

ペケ2だ。  
ペケ2だな。  
言いながらサイモン3の額にまたX印を書く。

サイモン1

サイモン2

サイモン1

俺はね、キュウリ人間が人を殺す時つてのは、一種の発狂状態にあるんじゃないかと思うんだ。だから、余計にわからない。  
なにが？  
計画を立てて人を殺すことが、さ。計画を立てるのは、自分が逮捕されたくないからだろう。

サイモン3

サイモン1

されたくないですよ。当たり前じゃないですか。  
そう、当たり前前だ。言換えれば臆病なんだ。殺人犯としての生涯を壁の中で送って自分の罪を全うする勇気がない程度に臆病なんだ。そういうキュウリ人間が、いざという時、予定通りに発狂できるんだろうか。俺には、想像できない。

サイモン2

人間は、本来、みんなどこかでトマトなんだよ。で、キュウリはずっとあとからできたんだよ。ごくトマトに近いキュウリ、ちよつと離れたキュウリ、もう少し離れたキュウリ、と、幾つもの段階があつてき、純粹なキュウリがある。だが、これはごく少ない。で、計画殺人なんかするのは、ちょうどトマトとキュウリの真ん中位の人間なんだ。

サイモン3

サイモン1

サイモン2

トマキュウ……。  
……。  
……。

サイモン3 キュウトマ……。

サイモン1 ……。

サイモン2 ……。

サイモン3 ペケ3。

自分で言つて、自分の額にX印を書く。

サイモン1 おまえは性悪説なのか？

サイモン2 性悪説とか性善説とか、割切るのは嫌だな。人間は本来、色んなものに縛られない生き

物なんだよ。だから道徳や法律ができたんだ。

サイモン3 阿呆い話をしてやしませんか？

サイモン1 ペケ……、

と言いかけるのを遮って、

サイモン3 だつてそうでしょう？話したつて、何の役にも立たない。丸っきりの無駄 話だ。

サイモン1 そうだな。ただ……。

サイモン3 ただ？

サイモン1 俺は時々怖くなるんだ。俺の部屋の隣には、どんな奴が住んでいるんだろう？引越して三年になるのに、俺はまだ、隣人のことを知らない。そいつはキュウリなんだろうか？もしかしたらトマト人間なんじゃないだろうか。でもって夜中に俺がちよつと大きな音でラジオをかけたらしたら、いきなり部屋に入ってきて、俺を殺したりするんじゃないだろうか。

サイモン3 苦労しますよ、そういう考え方だと。そこへゆくと俺ん家なんぞ、安全なものです。な

んせ隣に住んでいるのは、そりゃあもう静かな女だ。

いきなり悲鳴が上がると、真っ赤に血塗られた出刃庖丁を持った女が走り出てくる。金縛りにあったように動けなくなる三人。

出刃庖丁の女は、三人の体を次々に掴んでは離し、掴んでは離して、しどろもどろに言う。

出刃庖丁の女

毎朝、濃い霧に包まれたような状態で生返っていた……。物がよく見え

ないの。どうやっても焦点が合わない。奇妙な音が聞える。体が自由にならなくて、足を動かすことも、首を上げることもしかない。舌が麻痺しているのよ。頭の中に台風が生まれているのよ。全部がばらばらで霞んでいる。地面が濡れている……。光っていて眩しい……。私、そんな地面に横たわっているの。なにか堅い物に寄掛かって、ぐったりと横たわっている。霧……。霧雨が顔に降掛かってくる。頭の中の台風がますますひどくなる。うつむくと頬に水が触れる。鼻に水が入ってくる。水浸し……。目一杯、水浸し。……。誰かがいる。誰かが騒々しい音を立てている。騒々しい息をしている。まるで鼾のよう。誰かがなにか言っている。誰かは私？そんな筈ない。違うわ、違う。私は叫んで、そうすると、ようやく私は混乱した感覚の、不気味なかたまりじゃなくなってくる。少しずつ、少しずつ私はまとまって、……。私になる。眼が……。醒めたの。今日もそうやって、そうしたら……。そうしたら……。そうしたら……。私の部屋には他人がいた。他人がいて、私に言った。私に訊いた。……。幾らだい？会社に遅れるから早く支払いをさせたい。……。そんな積りじゃなかったのよ。私は娼婦じゃない。ただ……。ただ……。朝、気持よく目覚めたくて、他人の力を借りたくて……。それだけだったの。

女の長話が続く間に、手に手に箒を持った女たちが集ってくる。出刃庖丁の女は箒の女たちに取巻かれながら話しているが、いきなりサイモン3の体を掴んで叫ぶ。

出刃庖丁の女 信じて。

サイモン3、慌てふためいて、

サイモン3 信じます。

叫ぶ。

箒の女たちは出刃庖丁の女を引き立ててゆく。

サイモン3 俺の……。

サイモン1 えっ？

サイモン3 俺の隣の女ですよ、あの人。

サイモン1 まさか……。

サイモン2 多分、トマトになってしまったんだよ。

サイモン3 ええ。

サイモン1 衝動殺人しかできないキュウリ。

サイモン2 計画殺人をする奴は、きつと狂気を持続させようと必死になっているんだよ。人殺しを続ける気持が途中で挫けないようにするには、狂ったレールを敷いて、狂い続けてゆくしか方法はないんだ。

サイモン1 俺にはできそうもない。

サイモン2 俺にだってできない。

サイモン3 あの人、だから、計画もせずに殺しちゃったんですかねえ。

サイモン1 ああ。彼女はどこにも隠れ家を見つけないことができなかったんだ。

サイモン3 しっ。

慌ててサイモン1の口を塞ぐ。

サイモン3 隠れ家の話を隠れ家以外の所でしないで下さいよ。逮捕されるのは真つ平だ。  
サイモン1 ペケ1。

自分で自分の額に大きなX印を書く。

流れ込んでくるくのろまのサイモン。

三人は去ってゆく。

## 5 早告鳥

いきなり「お早よう」という女たちの声がする。  
それから箒の女たちが世の中を掃除しながら隊列を組んで現われる。  
箒の女たちは声を揃えて言う。

お早よう

お早よう

お早よう

家をきれいにしましょう

部屋をきれいにしましょう

体をきれいにしましょう

あなたの家はきれいですか

あなたの部屋はきれいですか

あなたの体はきれいですか

たちはそうした言葉を繰り返しながら壁の向うに消え、また現われては同じ言葉を繰り返す。  
何度目かのく清掃の後、激しくハンカチを揉みしだく女、ひっきりなしに腕時計を見る女、急ぎ足で歩いては、突然硬直し、うしろを振り返る女の三人が現われる。  
三人は、それぞれの癖を続けながら、脈絡もなく話しはじめた。

ハンカチの女

ひらりと澄んだ、その年の夏。

腕時計の女 夕方のように暗くて、もどかしい夢。  
振り返る女 哀しみの色が少し混ざった期待。

三人の女は自分たちの癖をし続ける。不意にハンカチの女が口を開き、

ハンカチの女

子供の頃の夢をよく見るわ。およそ無意味。生きる、ってことは、夢とはまったく別問題。誰でもみんな、目覚めた瞬間に夢を振り払い、顔を洗って、歯を磨いて、着替をして、靴を履いて、一日をできるだけだけ有効にすごそうと部屋を出てゆく。私だって、そう。私はみんな。だから言うわ。お早ようお早ようお早よう……。街をきれいにしましょう。体をきれいにしましょう。私、忠実な早告鳥、勤労奉仕の朝は、誰よりも早く起きて、お早ようの早起き鳥。だって仲間はずれは怖いもの。

箒の女たちがく壁をまわって現われる。と、ハンカチの女、腕時計の女、振り返る女の三人は、手にした箒であたりを掃きはじめる。  
箒の女たちは言う。

お早よう

お早よう

お早よう

三人の女は答えて言う。

お早よう

お早よう

お早よう

箒の女たちは言う。

家をきれいにしましょう

三人の女は答えて言う。

家をきれいにしましょう

箒の女たちは言う。

部屋をきれいにしましょう

三人の女は答えて言う。

部屋をきれいにしましょう

箒の女たちは言う。

体をきれいにしましょう

三人の女は答えて言う。

体をきれいにしましょう

箒の女たちは訊く。

あなたの家はきれいですか

三人の女は答えて言う。

私の家はきれいです

箒の女たちは訊く。

あなたの部屋はきれいですか

三人の女は答えて言う。

私の部屋はきれいです

箒の女たちは訊く。

あなたの体はきれいですか

三人の女は答えて言う。

私の体はきれいです

箒の女たちはく壁への向うに消えてゆく。  
すると三人の女は、それぞれの癖を再開する。

腕時計の女 あの人、私のアパートに住んでいた。私のアパートの私の部屋に。そうして私たち、いつも二人で大笑いするような、そんな愉快的生活をしていた。……私、泡のようにふわふわと、雲の中にいた。

腕時計の女が言葉を絶つと振り返る女が口を開く。

振り返る女 あなたに、離婚してと言った時、私、どうかしてたのよ。あれは……単に……ちよつと心暖まるナンセンスだったの……一日一回のナンセンスは消化を助ける……そうすれば……消化不良にならなくてすむでしょ……。

三人の女は呟き続ける。

ハンカチの女 デブの、ハイエナ面をした、吸血鬼のように強欲な父なし子、っていうのは、

一体なんのこと？

腕時計の女 まるで水銀のような人ね。遠くの方に姿を見かけて、そこへゆくと、もういない。

振り返る女 隠れ家の時間はすばやく絶っていったわ。今日は大事。明日は、もっと大事。でもきのうは過去の残り物……私は過去。昔話。

ハンカチの女憎悪しながら微笑できるのは、なにもあなた一人ではなくてよ。私……あなたから、それを学んだ。

腕時計の女 私……恐怖がどんな顔をしてるか、知っているわ。  
振り返る女 死にかけている……というのはね、実際に死なない場合は、相対的な表現にすぎないのよ。

隠れ家

<壁>の向うから、箒の女たちが現われてくると言っ。

お早よう

お早よう

お早よう

家をきれいにしましょう

部屋をきれいにしましょう

体をきれいにしましょう

三人の女は答えて言っ。

お早よう

お早よう

お早よう

家をきれいにしましょう

部屋をきれいにしましょう

体をきれいにしましょう

箒の女たちは訊く。

あなたの家はきれいですか  
あなたの部屋はきれいですか  
あなたの体はきれいですか

三人の女は答えて言う。

私の家はきれいです  
私の部屋はきれいです  
私の体はきれいです

箒の女たちがく壁への向うに去ってゆくと、三人の女は言う。

ハンカチの女 あほたれでんがく。  
腕時計の女 おろかだいこん。  
振り返る女 もう真つ平よ。私、オデンと都電に乗って、逐電したいわ。  
腕時計の女 あほたれでんがく  
振り返る女 おろかだいこん  
ハンカチの女 もう真つ平よ。私、オデンと都電に乗って、逐電したいわ。  
振り返る女 あほたれでんがく。  
ハンカチの女 おろかだいこん。  
腕時計の女 私、オデンと都電に乗って、逐電したいわ。

三人の女は同時に言っている。

三人の女 逐電したいわ、逃げたいわ。

互いの言葉が互いの耳に入り、三人の女は静止して顔を見合わせる。

ハンカチの女は、ゆっくりと腕時計の女を見る。腕時計の女は、ゆっくりと振り返る女を見る。振り返る女は、ゆっくりとハンカチの女を見る。

それから微笑し合う。

三人の女は箒で地面を掃きはじめ。

お早よう

お早よう

お早よう

私の家は汚いです

私の部屋はもつと汚いです

私の体はもつともつと汚いです

三人の女はそうした言葉を繰り返しながら去ってゆく。

## 6 おじやのかたまり、えっさっさ

く壁>の窓が開くと、薄茶色の眼帯をした女、濃紺の眼帯をした女、水色の眼帯をした女が顔を覗かせ、言う。

薄茶色の眼帯をした女 のろまのサイモン 菓子屋に会った  
濃紺の眼帯をした女 町の市場にゆく途中  
水色の眼帯をした女 のろまのサイモン 菓子屋に言った  
薄茶色の眼帯をした女 ひとつ毒味をさせとくれ

濃紺の眼帯をした女 のろまのサイモン 菓子屋に言われた  
水色の眼帯をした女 先におあしを見せとくれ  
薄茶色の眼帯をした女 のろまのサイモン 菓子屋に言った  
濃紺の眼帯をした女 俺はほとんど文なしだ

薄茶色の眼帯をした女 馬っ鹿よねえ。  
濃紺の眼帯をした女 馬っ鹿よ。  
薄茶色の眼帯をした女 お金がなくっちゃ、なんにも買えない。  
濃紺の眼帯をした女 お金があれば、なんでも買える

薄茶色の眼帯をした女 のろまのサイモン 魚釣り  
濃紺の眼帯をした女 鯨を釣ると 出て行った  
水色の眼帯をした女 糸を垂らした その池は

薄茶色の眼帯をした女 盥でできた 池だった

濃紺の眼帯をした女 馬っ鹿よねえ。

薄茶色の眼帯をした女

馬っ鹿よ。

濃紺の眼帯をした女 盥で鯨が釣れる訳ないじゃない

薄茶色の眼帯をした女 のろまのサイモン 薊の枝に

濃紺の眼帯をした女 梅の実 なるかと 出て行った

水色の眼帯をした女 棘でしたたか 指刺され

濃紺の眼帯をした女 ひゅうと口笛 哀れや サイモン

薄茶色の眼帯をした女 馬っ鹿よねえ。

濃紺の眼帯をした女 馬っ鹿よ。

薄茶色の眼帯をした女 薊の枝に梅の実がなる訳ないじゃない

窓から覗く女たちが話す間に、黒い眼帯をかけた男と緑色の眼帯をかけた女、黄色い眼帯をかけた男と茶色の眼帯をかけた女、紫色の眼帯をかけた男と金色の眼帯をかけた女が、手に手に椅子を持って現われると、椅子を置いては座りかけ、思い直して止め、また椅子を持って歩き、置き、座りかけては止めるという行為を繰り返しながら話しはじめた。

<窓>の女たちは、嘲りの百面相で覗く。

黒い眼帯をかけた男 疲れるだろう。

緑色の眼帯をかけた女 疲れるわ。疲れるでしょう。

黒い眼帯をかけた男 疲れる。

黄色い眼帯をかけた男 機嫌いいじゃないか。

茶色の眼帯をかけた女 機嫌いいわ。機嫌よさそうね。

黄色い眼帯をかけた男 機嫌いい。

紫色の眼帯をかけた男 どうする？

金色の眼帯をかけた女 どうしようか。どうする？

黒い眼帯をかけた男 隠れ家から帰ってくると、おまえはどうしようもなく疲れている。緑色の

眼帯をかけた女 隠れ家から帰ってくると、あなたはどうしようもなく疲れている。

黒い眼帯をかけた男 疲れた顔と疲れた顔を見合せて、俺たちは溜息をつく。

緑色の眼帯をかけた女 思案投首、結局、お酒。

黒い眼帯をかけた男 なんとかして自滅しないために作った隠れ家が、今じゃ、自滅を唆す蛇に

なっている。

緑色の眼帯をかけた女 あなたは、どんどん隠れ家が好きになって、私は家に帰りたくなくなつて、

黒い眼帯をかけた男 だが、帰らなければ逮捕で、

緑色の眼帯をかけた女 だから仕方なく帰ってきては、

黒い眼帯をかけた男 疲れた顔と疲れた顔を見合せては溜息をつく。

緑色の眼帯をかけた女 そうしてできるだけだけ視線を合せないようにして寝る。

黒い眼帯をかけた男 おじやのかたまり、えっさっさ。

緑色の眼帯をかけた女 おじやのかたまり、えっさっさ。

黒い眼帯をかけた男 硬直状態、えっさっさ。

緑色の眼帯をかけた女 決心つかずに、えっさっさ。

黒い眼帯をかけた男と緑色の眼帯をかけた女は椅子に座り、指を動かして話しはじめる。

黄色い眼帯をかけた男 いやあ、隠れ家ってのはいいもんだ。

茶色の眼帯をかけた女 ストレスを解消して元気いっぱい。

黄色い眼帯をかけた男 隠れ家を出る時、俺はいつもにこにこしているよ。さあ、家に帰るぞ。

茶色の眼帯をかけた女 私、隠れ家を出て、家に帰る途中のスーパーで買物するのが好きよ。

黄色い眼帯をかけた男 俺は、隠れ家で目一杯正直に俺と話すから、家に帰ってきた時には、もう

言葉がいらなくて、だからおまえを傷つけなくてすんで、新聞を読み、飯を食い、風呂に入って、満足の一日を終わる。

茶色の眼帯をかけた女 私たち一年以上、会話していなくて、だから家の中できごと は、いつもなんの支障もなく進んで、なにも滞らない。

黄色い眼帯をかけた男 思いたすとぞっとする。

茶色の眼帯をかけた女 隠れ家がなかった時、私たちが、正直になればなろうとする程、いがみあつ

て傷つけあつて、ほとんど殺意だった。

黄色い眼帯をかけた男 それにくらべりゃ今は、気楽のかたまりだ。

茶色の眼帯をかけた女 おじやのかたまり、えっさっさ。

黄色い眼帯をかけた男 おじやのかたまり、えっさっさ。

茶色の眼帯をかけた女 気楽のかたまり、えっさっさ。

黄色い眼帯をかけた男 いつも黙って、えっさっさ。

黄色い眼帯をかけた男と茶色の眼帯をかけた女は椅子に座り、指で一人言を言いはじめる。

金色の眼帯をかけた女 かわいそうだわ……。お茶を飲む？

紫色の眼帯をかけた男 お茶もいらぬ。同情もいらぬ。

金色の眼帯をかけた女 帰ってくる。ドアを開ける。電気をつける。いつものようにテレビをポン

と叩いて元気づけ、ビールの蓋を開けて、きのうの洗い物はとりあえずそのままにして  
おいてビールを飲む。冷蔵庫には肉が入っていて、銀行には多少のお金があつて、人生

に目的なんてものは大して必要ないのよ。

紫色の眼帯をかけた男 俺には必要なんだ。隠れ家のマスターベーションだけじゃ、すっきりしないんだ。

金色の眼帯をかけた女 かわいいそうだな……。お茶を飲む？

紫色の眼帯をかけた男 お茶もいらさない、同情もいらさない。

金色の眼帯をかけた女 私、あなたの口から出てくる言葉がわからなくて、泣きだしそうな気持ちと、笑いだしそうな気持の真ん中でやじろべえのような顔になる。

紫色の眼帯をかけた男 ここをさ、この部屋をさ、隠れ家に行きたいんだ、それだけのことなんだ。

金色の眼帯をかけた女 だったら、どこに帰るの？隠れ家は行くところなのよ。家は帰るところなのよ。私、捕まるの嫌。

紫色の眼帯をかけた男 わかってくれないんだあ。

金色の眼帯をかけた女 わかってくれないじゃない。

紫色の眼帯をかけた男 おじやのかたまり、えっさっさ。

金色の眼帯をかけた女 おじやのかたまり、えっさっさ。

紫色の眼帯をかけた男 おじやのかたまり、えっさっさ。

金色の眼帯をかけた女 話のかたまり、えっさっさ。

紫色の眼帯をかけた男 いつも煮つまり、えっさっさ。

紫色の眼帯をかけた男と金色の眼帯をかけた女は椅子に座り、指の会話で喧嘩しはじめる  
窓から覗く女たちが言う。

薄茶色の眼帯をした女 馬っ鹿よねえ。

濃紺の眼帯をした女 馬っ鹿よ。

薄茶色の眼帯をした女 馬鹿のかたまり、えっさっさ。

濃紺の眼帯をした女　遠慮のかたまり、えっさっさ。

と、椅子に座った男女は指の会話を止めて言う。

黒い眼帯をかけた男　おじやのかたまり、えっさっさ。

緑色の眼帯をかけた女　おじやのかたまり、えっさっさ。

黒い眼帯をかけた男　硬直状態、えっさっさ。

緑色の眼帯をかけた女　決心つかずに、えっさっさ。

茶色の眼帯をかけた女　おじやのかたまり、えっさっさ。

黄色い眼帯をかけた男　おじやのかたまり、えっさっさ。

茶色の眼帯をかけた女　気楽のかたまり、えっさっさ。

黄色い眼帯をかけた男　いつも黙って、えっさっさ。

金色の眼帯をかけた女　おじやのかたまり、えっさっさ。

紫色の眼帯をかけた男　おじやのかたまり、えっさっさ。

金色の眼帯をかけた女　話のかたまり、えっさっさ。

紫色の眼帯をかけた男　いつも煮つまり、えっさっさ。

椅子の人々は立上ると椅子を持って去ってゆく。  
覗いていた女たちは窓を閉める。

## 7 時の船

黒い眼帯をかけた男、黄色い眼帯をかけた男、紫色の眼帯をかけた男、緑色の眼帯をかけた女、青い眼帯をかけた女、茶色の眼帯をかけた女、金色の眼帯をかけた女、銀色の眼帯をかけた女、灰色の眼帯をかけた女、桃色の眼帯をかけた女、若草色の眼帯をかけた女、薄茶色の眼帯をした女、濃紺の眼帯をした女、水色の眼帯をした女が椅子を振りかざして走り出てくる。  
人々は口々に叫んでいる。

黒い眼帯をかけた男 隠れ家が見つかったようだ。

緑色の眼帯をかけた女 二つも見つかったそうだ。

灰色の眼帯をかけた女 一つには女が隠れているようだ。

薄茶色の眼帯をした女 もう一つにも、女が隠れているようだ。

青い眼帯をかけた女 女を探せ。

黄色い眼帯をかけた男 隠れ家を探せ。

茶色の眼帯をかけた女 隠れ家に隠れている女を探せ。

濃紺の眼帯をした女 見つけたら捕まえろ。

水色の眼帯をした女 捕まえたら連れだせ。

桃色の眼帯をかけた女 隠れ家から連れだせ。

若草色の眼帯をかけた女 警察を呼べ。

銀色の眼帯をかけた女 リンチしろ。

紫色の眼帯をかけた男 隠れ家はどこだ？

金色の眼帯をかけた女 女はどこだ？

二人の女が追われて現われる。椅子の人々は奇妙に歪んだ体で二人を追詰めてゆく。二人はうたて、うたた、と名付けられている。

隠れ家

うたて 遠くゆるやかな、時間の回転木馬がまわるところに行きたいだけ。

うたた 偶然の中から、きれいな音を拾い上げることのできるころに行きたいだけ。

うたて 一本の勇氣のように、私の眠りの頂上に立つ避雷針を探したいだけ。

うたた ゆるりと背を向けて、笑いたいだけ。

うたて 堅い夜の底にある、柔らかいものに包まれたいだけ。

うたた 役に立たないものや、遊んでいるものが好きないだけ。

うたてとうたたは逃げまどいながら言う。

うたて 色んな音や、ものや、匂いや、味で、越える時間。

うたた 色んな音や、ものや、匂いや、味で、越える空間。

うたて こと、そこが入替わる、時間。

うたた こと、そこが入替わる、空間。

うたて 私には隠れ家が必要なの。

うたた 必要なの、隠れ家が、私には。

うたて どうしても必要なの。

うたた 必要なの。どうしても。

うたては立ち止まり、言う。

うたて この地球の、色んな場所で、人が死にかけているわ。生まれかけているわ。望まれて生

まれかけている子供がいるわ。望まれずに生まれかけている子供がいるわ。理由があつて殺されかけている大人がいるわ。理由がなくて殺されかけている大人がいるわ。望まれようと望まれまいと、生まれてくる子は、生まれてくるわ。理由があるうとなかろうと、死ぬ人は死ぬわ。そうなんだわ。でもね、私、生まれてくることは選べなかつたら、せめて死ぬには理由が欲しい。なぜ私は死ななくちゃいけないの？私、わからないわ。

うたは立ち止まり、言う。

うた

私の体の中には、磁石が入っているの。それはいつも同じ方向を指すの。そうして磁石を引寄せる声は、毎日少しずつ強くなつて、あつちだ、と、告げる。あつち、だ、と。あの方向、あつちだ……。あの空、あつちだ……。あの海の向う、あつちに、私の大陸、私の国がある。あつちだ……。あつちだ……。あつちだ。私の体の磁石は、あつちを指して、動かない。私の場所を指して、もう、動かない。だから行く……。私は行く。

うたは言う。

うた

私は命……。ただ、現在（いま）の命。ただ、現在……。ただ、現在……。ただ現在……。ただいま……。私は、隠れ家のドアを開けて言う……。

うたは叫ぶ。

うた

ただいま。

その言葉が終わると同時に暗黒が訪れる。

## いびつな奴が……

暗黒の中にマザー・グースの童謡くいびつな奴が……>が流れる。

溶明すると、うたてとうただが目隠しをされて立っている。

<壁>の窓が開いて、眼帯の人々が顔を現わし、二人を覗く。

覗きながら、緑色の眼帯をかけた女、青い眼帯をかけた女、茶色の眼帯をかけた女、金色の眼帯をかけた女、銀色の眼帯をかけた女は言う。

背骨曲りの 天の邪鬼

背骨曲りの 旅をして

背骨曲りの 石段で

背骨曲りの 六文 拾い

背骨曲りの 猫を買い

背骨曲りの 鼠を取らせ

背骨曲りに 暮してる

覗きながら、眼帯の男たちは言う。

ひねくれ者が おりまして

ひねくれ道を 歩いてた

ひねくれ垣根の 木戸のそば

ひねくれお金を 拾います

ひねくれ鼠を 捕まえる

ひねくれ猫を 手に入れて  
ひねくれ小さな あばら家で  
ひねくれひねくれ 暮して

覗きながら、灰色の眼帯をかけた女、桃色の眼帯をかけた女、若草色の眼帯をかけた女、薄茶色の眼帯をした女、濃紺の眼帯をした女、水色の眼帯をした女は言う。

昔 曲った奴がいて  
曲った道を やつてきた  
曲った垣根の 曲り角  
曲った金を 拾います  
曲った猫を 買いました  
曲った鼠を 捕まえて  
曲った小さな 一つ家に  
曲ったままで 暮して

眼帯の人々は言う。

いびつな奴が おりました  
いびつな道を 行きました  
いびつな階段 ありました  
いびつな金が 落ちていて  
いびつな鼠を 捕まえる  
いびつな猫を 買いました

いびつな家に 住みました

眼帯の人々が、歪んだ百面相と、歪んだ声で言う間に、うたてとうたは、ひどく緩慢に崩れ折れてゆき、了。

